

誕生日は呪われるべきか—W.B. イェイツの 『窓に刻まれた言葉』を読む

加藤 英 治

1. はじめに

『窓に刻まれた言葉』は1930年に執筆され、同年ダブリンのアベイ・シアターで初演された劇である¹⁾。

この劇は窓に言葉が刻まれたダブリンのある下宿屋で開かれた、いわば失敗した交霊会を描いている。なぜ失敗かと言えば、望まれない三人の霊たちによって生前の三角関係のもつれが演じられてしまうからである。三人の霊たちとは18世紀の作家、ジャーナリスト、ジョンナサン・スウィフト（1667—1745）と彼の恋人、ヴァネッサとステラである。

スウィフトについてはあらためて説明するまでもないだろう。『ガリバー旅行記』の作者としてあまりにも有名である。彼はダブリン生まれで、聖パトリック大聖堂副監督の地位にあったが、アイルランド問題をめぐる種々のパンフレットを出版するなどして活発な政治活動を行った。

生涯独身だったスウィフトの恋愛遍歴はよく知られている。とりわけヴァネッサとステラとの三角関係はよく知られている。しかしその実体ということになると、あまりよく分からないようだ。

ヴァネッサの本名はヘスター・ヴァノムリ（1690—1723）で、ヴァネッサはスウィフトによる呼び名である²⁾。1707年から1709年の間に二人の恋愛関係が始まったらしい³⁾。劇中に「5年前にあなたを追ってアイルランドへ来ました」という彼女の言葉があり⁴⁾、また彼女がスウィフトを追ってダブリンに移り住んだのが1714年であることから、劇中のスウィフトと彼女の会話はおそらく1719年に設定されている⁵⁾。ヴァネッサが死ぬのはその4年後のことである。

一方ステラの本名はエスター・ジョンソン（1687—1728）で、ステラもまたスウィフトによる呼び名である⁶⁾。1689年に二人ははじめて出会い⁷⁾、恋愛関係がいつごろ始まったかははっきりしないが、その関係は彼女の死まで続いた⁸⁾。

参加者の中の二人の人物、トレンチ博士とジョン・コーベットによって私たちはこの下宿屋がかつてスウィフトやステラの知人たちの私邸であったこと、窓に刻まれている言葉はステラが書いた詩の一節で、ステラ自身が刻んだらしいこと、その詩はスウィフトの54歳の誕生日を祝って書かれたものであることなどが知らされる。この54歳の誕生日ということと、劇中の「この前の私の誕生日のために書いてくれた詩」というスウィフトの言葉から（612）、劇中のスウィフトとステラの一風変わった会話（スウィフトはステラに問い掛けるが、答えようとするステラを制してスウィフトは一方的に話し続けるのである）はおそらく1721年に設定されている。

これらの事情を踏まえれば、一見素っ気無く、ぶっきら棒な『窓に刻まれた言葉』というタイトルは<生の祝福>を暗示していると言ってよい。劇中に霊として登場するスウィフトはステラが捧げてくれた詩の内容ばかりにかかずらあい、せっかくの感動を置き去りにして技術的批評を試みたりしている

が、本質的に重要なのはステラの愛という源から発した詩を捧げるという行為そのものであり、そのことによってスウィフトの生が祝福されているという事実でなければならない。

一方、この劇の最後の言葉は舞台上から霊媒一人を残して誰もいなくなったときにこの霊媒を通して発せられるスウィフトの言葉、「我が生まれし日亡びうせよ」である（617）。これは財産を失い、子供を殺され、悪病に苦しめられ、妻に背かれ、友人たちにも裏切られるというあまりに過酷な生の現実と直面して、神の義なる支配を疑うに至った旧約聖書のヨブの〈生の呪咀〉の言葉を当然私たちに想起させる⁹⁾。

この劇のタイトルと最後の言葉の対立の構図、すなわち〈生の祝福〉と〈生の呪咀〉の両極性の構図を読み解くこと。私たちが試みてみたいのはこのことである。

2. 交霊会とその参加者

交霊会と聞けば私たちはなにやら怪しげでいかがわしい集まりを想像してしまうかもしれない。しかし交霊会を「死者の霊が生者と交流する場」と定義すれば、そのような交流を望む生者の意識の現象としてひとまず私たちも受け入れることができるだろう¹⁰⁾。おそらく劇の言葉の力は霊たちのリアリティーへの私たちの不信を吹き飛ばしてしまうだろうが。

さて交霊会の参加者はどのような人々か。

参加者は七人。トレンチ博士、ミス・マッケナ、ジョン・コーベット、コーニーリアス・パタソン、エイブラハム・ジョンソン、ミセス・マリット、ミセス・ヘンダーソンである。一人ずつ簡単に紹介していけば、トレンチ博士はダブリン心霊術協会の会長である。ミス・マッケナは協会の秘書で実務を受け持っている。ジョン・コーベットはスウィフトとステラについての博士論文を執筆中のケンブリッジ大学の学生で、交霊会には初参加の懐疑論者である。ギャンブル好きのコーニーリアス・パタソンは教会で聞かされる天国のコンセプトに不満で、死後の世界においても現世的快樂が存在することを期待して、ミセス・マリットの死んだ夫にそのことを聞いたがっている。エイブラハム・ジョンソンはベルファストの牧師で、貧しい人々や無学な人々への伝道のために過去の偉大な伝道師の助けを借りたいと思っている。ミセス・マリットは喫茶店を開くことを計画していて、死んだ夫からの助言を望んでいる。ミセス・ヘンダーソンはロンドン在住の霊媒で、自分の生まれた土地ダブリンで心霊術を普及したいと考えている。

交霊会の参加者たちはトレンチ博士とジョン・コーベットを除けば、あまり上等な人々とは言えない。ミセス・ヘンダーソンもけっしてボランティアで霊媒をしているわけではない。しかし彼らは「普通の人間らしさを犠牲にする」ことなく¹¹⁾、また「人間らしさへの背信」からも程遠い人々である¹²⁾。すなわち彼らは他者との交流を愛し、生活を愛する等身大の人間たちである。これは「後世の人々と交流することにまったく関心を持たず、すべての卑俗な霊たちを圧倒的な情動の力で黙らせてしまう」スウィフトの霊とは対照的であると言うべきである¹³⁾。

今回の交霊会は4回目で、最初の交霊会はどうやら成功したらしいが、その後2回の交霊会は同一の望まれない霊の侵入者によって台無しにされてしまったのである。そのためエイブラハム・ジョンソンは悪霊祓いの呪文を唱えることを提案する。彼はベルファストからダブリンまでの交通費を無駄にしないよう、前回の交霊会の後、ベルファスト大学の図書館で古い書物から呪文を写し取ってきたのであ

る。

しかし、トレンチ博士は悪霊というコンセプトを否定する。

霊は私たちと同じような人々であり、私たちは彼らを客として扱い、非礼な行為や虐待をしてはなりません……………霊の中にはこの世界から離れられないものたちもいます——彼らは自分たちがまだ生きていてと考えていて、過去の生活の中のある行為をなんども繰り返します。それは私たちがある悲痛な思いをなんども反復することに似ていますが、ただ彼らの世界では思念が実在となるのです。たとえば変死した霊がはじめて霊媒を訪れるときにはすべての死の苦しみをふたたび体験します……………ときには霊は死の痛みではなく、生における情動的な、すなわち悲痛な瞬間をふたたび体験します……………意味不明の言葉を発し、話し掛けられても応じないこの霊はそのような性質のものです。私たちがよく耐えれば耐えるほど、この霊はより速やかにその情動と悔恨から解放されるでしょう。(603—04)

エイブラハム・ジョンソンはトレンチ博士の説明にあまり納得した様子はないが、しぶしぶ悪霊祓いの呪文を唱えることを諦める。

3. スウィフトとヴァネッサ

参加者たちが賛美歌を唱和するうちに霊媒のミセス・ヘンダーソンが眠り、彼女の支配霊であるルーラーという少女の霊が彼女に憑依する。ルーラーに導かれてミセス・マリットの夫の霊がなにごとかを伝えようとする。しかしスウィフトとヴァネッサの霊が独占的にミセス・ヘンダーソンを通して語り始めてしまう。

まずスウィフトが、自分とステラの結婚の事実の有無をステラに手紙で問い合わせたことについて、ヴァネッサを厳しく叱責する。スウィフトはヴァネッサを知的な女に改造しようと苦心していた。それなのに自分の期待に反して、ヴァネッサがまるで鍵穴に耳を当てて盗み聞きするような下品なふるまいをしたので激しい怒りを覚えたのだ。

これにたいするヴァネッサの反論は愛しているからステラに問い合わせたのだというものである。この単純で率直なヴァネッサの言葉を私たちは聞き逃してはならないだろう。単純で率直な感情を生きる彼女には理解することができないのだ。どうして他の男たちや女たちと同じように二人が結婚してはいけないのか。

きわめて情熱的な人間であると自ら認めながら結婚を拒絶するスウィフトの弁明は、子供への狂気の遺伝にたいする恐れである。彼は自らの知性の腐蝕を予見し、それが子供に伝わることを恐れたのである。

スウィフトは内耳の異常を原因として目まい、吐き気などを起こすメニエール病に生涯苦しめられたが、スウィフトの時代にはまだその原因は突き止められていなかった。メニエール病の原因が特定されたのは1861年のことである¹⁴⁾。

もちろんあくまでもスウィフトと結婚し子供を産むことを諦めないヴァネッサはスウィフトの傲慢な知性の専制に反発して、「あなたほど強い情熱を持った男はアイルランドには他にいない」と言い(610)、その情熱を受け入れるよう迫る。ヴァネッサはどんな結果になろうとも、目の前にいるこのスウィフトという男と結婚し、その子供を産むという比類のない経験に関心があるのだ。それが彼女に

としては愛を生きることなのだとってもよい。

しかしスウィフトは自分の狂気が遺伝しなかったとしても、おそらくは生まれてくるだろう健康だが知性を欠いたごろつきやならず者によってこの世界がますます悪化することを望まない。スウィフトは自らの情熱が命ずるところに逆らい、敵という言葉まで使ってヴァネッサを退ける。

4. スウィフトとステラ

スウィフトとヴァネッサの霊がミセス・ヘンダーソンから離れ、ふたたびルールーの声が聞こえてくる。ルールーは必死になって参加者たちが望んでいる霊を捜すが、それも空しく失敗に終わり、ふたたびスウィフトの霊がミセス・ヘンダーソンを占有し、その声が聞こえてくる。

ヴァネッサとのからみでは知性による情熱の抑圧という形で、たしかに辛い選択だったにせよ、困難を切り抜けることができたスウィフトだったが、ステラとのからみでは知性自体がひび割れを起こしてしまう。すなわち知性は傲慢さを放棄し、自らの正当性を疑うに至る。

愛するステラよ、私はおまえに非道な仕打ちをしているのか？ おまえから幸せを奪っているのか？ おまえには子供もなく、恋人もなく、夫もない。友人として不機嫌な老い始めた男がいるだけだ。(612)

スウィフトの知性にひび割れを起こさせているのは、生とは自分が他者を不幸にするかもしれない、その恐ろしい可能性のことであるという認識であると言ってよい。

他者の幸せに責任を負うのは恐ろしいことだ。(613)

スウィフトが抱くステラにたいする不正への危惧を払拭するのは彼女がスウィフトの誕生日を祝って彼に贈った自作の詩である。この詩の内容は乱暴に要約してしまえば次のようなものである。

知性は永遠の生命を持ち、人に永遠の若さを与えることをあなたは私に教えて下さった。どうか長生きをして私にあなたの豊かな知性を分け与えて下さい。そうすればいつか訪れるあなたの死の悲しみにも威厳をもって耐え、次の日にあなたの後を追うことができるでしょう(613)

これはスウィフトがまさに疑義を抱いている思想に他ならない。しかし、この詩はこの劇において沈黙を貫き通すステラの存在自体と言ってよい。ステラはまさに詩として存在しているのだ。スウィフトは自分が疑義を抱いている思想が一人の女によって美しい言葉で表現されたとき、まさにその思想を信じたのである。

5. 最後のスウィフト

ステラに自分の死を看取られることを願いながら、スウィフトの霊がミセス・ヘンダーソンから離れ、ルールーの霊もまた離れて、交霊会が終了する。

ミセス・ヘンダーソンは交霊会は失敗だったが、謝礼を受け取りたいと思っている、それもできるだけ多額の謝礼を。なぜならば、彼女は最善を尽くしたからである。トレンチ博士の指示通り、よく耐えた参加者たちは、所期の目的は果たさなかったものの、当然のこのように謝礼を払い、帰路につく。

彼らはミセス・ヘンダーソンが最善を尽くしたことを知っているからである。彼らは苦悩する霊たちに哀れみを感じ、彼らの苦悩を受け止めることによって、彼らの救いにすこしは貢献できたと思っているかもしれない。

霊たちのふるまいについて違った理解のしかたをしているのがジョン・コーベットである。彼はミセス・ヘンダーソンが優れた女優であり、また学者だと考えている。彼はミセス・ヘンダーソンの、あるいは霊たちの暗示をより確かなものにするために問う。

スウィフトは彼の時代の知性、ついに迷妄から解放されたあの傲慢な知性をもっともよく代表する人物でした。彼はその衰弱を予見しました。彼は民主主義を予見し、未来を恐れたに違いありません。彼が子供を持つことを拒んだのはそのような恐れからだったのでしょうか。スウィフトは狂っていたのでしょうか。それとも知性そのものが狂っていたのでしょうか。(615)

すなわちスウィフトが女に自分の子供を産ませることを拒んだのは彼個人の狂気の遺伝への恐れからなのか、それとも知性を欠いたごろつきやならず者の新世代を増加させることによって彼らが権力を獲得することへの恐れからなのか。

この問いにたいして私たちは次のように答えたい。すなわちスウィフトは集団的狂気へ傾斜していく社会の中で英雄的孤立を守ることが望んでいた。しかし自らの内に宿る狂気の自覚によってスウィフトは孤立の不可能性を認識した。自らもまた集団的狂気への傾斜に加担しているのではないか。これがおそらく公共性と個人の逆立の極限とも言うべき優生学的な選択を強いられたスウィフトの苦悩の中心だったと言ってよい。

スウィフトという名前さえ知らないミセス・ヘンダーソンは当然この問に答えることはできない。彼女は目を覚ます直前に見た男の姿を叙述するのみである。それは最後のスウィフトである。

最後のスウィフトは、衣服は汚れ、顔じゅうに腫れものができ、片方の目が膨れて、まるで鶏の玉子のように顔から突き出ていた。これはジョン・コーベットによれば、スウィフトの老年時代のすがたで、自分の死を看取って欲しいという願いも空しく、ステラははるか以前に亡くなり、廃人と化したスウィフトは友人たちからも見離されてしまっていたと言う。

実際スウィフトは75歳ごろから記憶力を失い始め、異常な行動が目立ち始めたが、それは老衰によるものだった¹⁵⁾。

ジョン・コーベットが退場すると舞台上にはミセス・ヘンダーソンだけが残る。彼女はお茶の準備に取り掛かり、すっかり日常的な自分に戻ったように見える。しかし実はそうではなかった。ミセス・ヘンダーソンの日常的な自我とスウィフトの霊が目まぐるしく入れ変わるのである。ミセス・ヘンダーソンがやかんを火に掛けたとたん、スウィフトの霊が憑依して彼女はしゃがみこみ、離れていった友人の大臣たちを指を折って数える。ふたたびお茶の準備に戻り、彼女はお茶入れやカップや受け皿を捜す。お茶入れと受け皿はすぐに見つけるが、カップが見つからない。そうこうしているうちに、ふたたびスウィフトの霊が憑依し、受け皿が彼女の手から滑り落ちて割れる。そして〈生への呪咀〉が唱えられる。

我が生まれし日亡びうせよ。(617)

6. 結 語

ヨブが直面した問題は次のようなものだった。

正義と愛の唯一なる神によって作られ、また支持されているこの世界に、なぜに苦痛と悪が存在するか¹⁶⁾。

そしてヨブが見いだした解決は次のようなものだった。

ヨブは予期しなかったところに、自然の黙示を通して、愛の神との人格的霊交において、彼の問題の解決を発見した。たとえ理知的には解決が与えられなかったとしても、神の顕現そのものが彼の渴した魂を医すには充分であった¹⁷⁾。

ヨブはその悲惨な状況を肯定し、〈生への呪咀〉を〈生への祝福〉に転換した。それは自然の黙示を通して神の愛を直観したこと、そして神と直接に交わったことによって可能となったのであった。

最後のスウィフトが悲惨な状況のうちにありながら優生学的な思考の呪縛を解き、生を肯定できるとすれば、それはどのようにして可能か。

スウィフトはステラが自作の詩を通して自分に贈ってくれたものが、生とは、知性による正／不正の臆断やあて推量を超えて、他ならぬステラの詩がその結実であるような、愛にあふれた創造的なものであることの証明であることにいつの日か気づいたとき、救われるかもしれない。すなわち生まれてこなければよかった生命などありはしないのである。

しかしヴァネッサの死がスウィフトに重くのしかかりはしないだろうか。ジョン・コーベットはヴァネッサの早世は失恋の傷心によるものだったかもしれないと推測している。この推測が正しければ、法律上の責任はともかく、身持ちの悪さのために一人の女を苦しめて死に追いやったというそしりを免れることはできないだろう。

フランス・ロマン派のミュッセ（1810—1857）に『戯れに恋はすまじ』という印象深い劇がある¹⁸⁾。1834年に発表され、1861年パリで初演されたこの劇は、貴族の若い男女が本当は愛しあっているのに、高慢さゆえにそれを認めることができず、偽装された三角関係の犠牲となって素朴な村娘が死に、その結果結ばれるべき二人の愛も壊れてしまうという筋立てだが、主人公の青年貴族の台詞に次のようなものがある。

男はみんな嘘つきで、浮気で、賈せもので、おしゃべりで、偽善者で、高慢かそれとも卑怯で、見さげはてたものであり、情欲の奴隷だ。女はすべて裏ぎり者で、狡猾で、見え坊で、物見だかくて性根が腐っている。人の世は底の知れない泥沼で、そこには奇々怪々な恰好をした海豹が、泥土のうで匍いまわったり、のたうちまわっている。ただ人の世には一つだけ神聖な、崇高なものがある。それはあんなにも不完全な、あんなにも醜悪な二つのものの結びあいなのだ。人は恋愛ではいくたびとなく欺かれ、いくたびとなく傷つけられ、いくたびとなく不幸になる。しかし人は愛するのだ。そして自分の墓穴のふちまで来た時、こしかたを振り返り、こう独り言をいうのだ。わたしはたびたび苦しんだ、時には考え違いもした、しかしわたしは愛した。生活したのはわたしだ、わたしは高慢と退屈とが創りあげたこしらえものではないのだ¹⁹⁾。

この台詞は青年貴族のものというよりむしろ壊れたばかりのジョルジュ・サンドとの愛を乗り越え、あ

くまでも愛を肯定し、生を肯定しようとするミュッセ自身の心情の強引な介入のように読める。あたかも最後のスウィフトのようにミュッセもまた絶望の中にあったが、ミュッセはそれでもその中から立ち上がろうとしているように見える。しかしスウィフトにはもうすこし時間が必要なようだ。

〔注〕

- 1) See A. Norman Jeffares and A. S. Knowland, *A Commentary on the Collected Plays of W. B. Yeats* (London : Macmillan, 1975) 220.
- 2) See Jeffares and Knowland 223.
- 3) See Paul Turner, ed., *Gulliver's Travels*, by Jonathan Swift (London : Oxford UP, 1971) xxxi.
- 4) *The Collected Plays of W. B. Yeats* (London : Papermac, 1982) 609. 以下この劇からの引用はこの版によるものとし、かっこ内に頁数を示す。
- 5) See Jeffares and Knowland 239.
- 6) See Jeffares and Knowland 223.
- 7) See Turner xxxi.
- 8) See Jeffares and Knowland 223.
- 9) See Job 3. 3.
- 10) A. S. Knowland, *W. B. Yeats : Dramatist of Vision* (Gerrards Cross : Colin Smythe, 1983) 178.
- 11) John Rees Moore, *Masks of Love and Death : Yeats as Dramatist* (Ithaca : Cornell UP, 1971) 266.
- 12) Moore 267.
- 13) Moore 261.
- 14) See Jeffares and Knowland 239.
- 15) See Jeffares and Knowland 245.
- 16) 馬場嘉市編、『聖書大辞典』（東京：新教出版社，1951）1264.
- 17) 馬場嘉市 1267.
- 18) 本稿におけるミュッセ関連の事項の記述についてはアルフレッド・ド・ミュッセ著，進藤誠一訳，『戯れに恋はすまじ』（東京：岩波書店，1977）の解題を参照した。
- 19) ミュッセ 61—62.